

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 101 号

2017年 6月



第 151 回 高山（瀬峰）ブナ林の新緑観察会

5月14日(日)に高山(瀬峰)ブナ林の新緑観察会を実施しました。参加者は16名でした。当日は生憎の小雨模様になりましたが、霞が漂う林間に若葉が瑞々しく輝き、格別の森の表情を観察することができました。

登山口で出発の準備もそこそこにダケカンバに巻きついたイワガラミの若葉が泡で被われる現象を発見しました。ダケカンバの樹皮の石炭成分が幹流水中に溶出したためでした。登山道に沿った土塁では、自生するムラサキヤシオやコヨウラクツツジ、ガクウラジロヨウラクが咲き始め、滴る雨雫を纏った花輪が参加者の目を引き付けます。雨の中でなければ出会えない森の一面です。

登山口から暫く続く2次林の林床ではウワミズザクラの芽生えやアオダモ、ムシカリの稚樹が多く見られました。目的は不明ですが、的場川への分岐を過ぎた950m付近は、1998年に一部が伐採されました。およそ20年を経てその跡地には若いミズナラ林が形成されていました。この様に登山口から瀬峰までは時期をずらして伐採が繰り返された形跡が認められます。30年前の会創立当時、瀬峰までの一帯の林相は貧弱でしたが、今では、それぞれの伐採時期に応じた代償林が形成され、ミズナラ林からブナ林に至る異なった遷移過程が混在するいわゆるシフティングモザイク現象が観察される樹林帯に成長していました。この貴重な自然林がこのまま保護されることを願いながら下山の途につきました。



散乱光に若葉が映える自然林



雨雫をまとったコヨウラクツツジ

第151回 高山（瀬峰）ブナ林の新緑観察会に参加して

佐藤久美子

今回は、1年ぶりの観察会の参加となります。会員の皆様は、お変わりなくお元気で笑顔で迎えてくれました。ありがとうございます。参加者16名、守さんと奥田さんの車に乗り込み出発です。観察コースは、土湯男沼林道のゲートの許可をもらい通過して、高山登山口まで、車で乗り入れました。今回のコースは、高山を守る会のスキー場開発反対の発端の場所だそうです。朝から雨降りとなり、カッパを着て、折りたたみ傘の持っている人が多くて、色とりどりの行列が出来て、それもカラフルな感じです。

車の近くのダケカンバの木肌に、洗剤のような泡が付いていました。雨の日は、樹脂が溶け出して来るそうです。初めて見ました。歩き出すと、足元にタチツボスミレが咲いていました。森は、もやに包まれて雨に濡れた新緑が瑞々しく、純白のムシカリの花がとても美しく幻想的な感じです。ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、イタヤカエデの花たちも可愛らしく下がって咲いているし、コウラクツツジの花も可憐だし、アオダモの雨に濡れた緑色の木肌もリョウブ、クロモジ、ブナの若葉のつやつや、ふわふわ、もふもふの柔らかい赤ちゃんの様な感触がもう右を見ても、左を見ても、足元の芽出しの数も。生命力の強さを感じます。

ふと、枝先の雨雫に目が止まりました。1センチも無い、その雫の中には、反対側の広葉樹が、逆さまに、しっかりと映しだされています。それを、ルーペで覗くと、本当にビックリです。何度も何度も雫を、覗きこみました。ブナ林が、伐採されて、赤松が植林された森は、30年を経て、森の自分達の力で、広葉樹の立派な森に再生していました。暗かった登山道も明るい光の入る森に生まれ変わったようです。守さんが、何度も良い森になったなー。と嬉しそうでした。

お昼は、雨の中車のトランクを屋根にして、美味しく頂きました。帰り道に、車で、伐採されずに残ったブナ林を、見に行きました。それはもう、伸び伸びと真っ直ぐで。幹も太く、枝もはっついて、堂々と凛として、息をのむ美しさです。残っていてくれてありがとう。

反対運動をしてくれて、このブナが守られて、本当に良かったです。高山を守る会に、感謝します。



雨の森は幻想的です



ミズナラ林にて



雨でも豪華な昼食

里山の自然に包まれて

佐藤ミチ子



カタクリ群落を背に

初めて参加させていただいた自然観察会。こんな身近なところに「すごいところ」があったんだと認識を新たにしました。男沼駐車場に着くや、見たこともないカタクリの群生が目に入ります。カタクリは花が咲くまで7～8年かかり、蟻が種を運んで芽が出た1年生、葉っぱになった2年生を見つけると、里山の自然の営みが人間の時間と違うスピードで巡っていると実感します。春を告げる花々と数多く出会い、その佇まいに心癒されます。一つ一つが可憐にそっと咲き、派手な自己主張はしていません。しかしその姿は無視できない存在感

を持っていて魅力的です。個性豊かな花たちの名前を覚えるには時間がかかりそうですが、まずは、スマレから。今回、タチツボスマレは名前と姿が一致したかと思えます。

里山で人間は自然とつながって生きてきました。ナラやケヤキを炭焼きや木工に使い、生活のエネルギーや生活用品にしていました。私は、そんな生活の断片をうっすら思い起こせる世代の一人です。より快適な生活、より効率的な生活のため、里山を経済の歯車に取り込んだ様子も記憶の片隅に残っています。今回の観察会で、進路に向かって左側が昔からの里山、右側が杉の植林のあとに手つかずとなった山を一見する場所を見せていただきました。一目瞭然とはこのことでした。里山の悠久の時間を刻む様子と、一時期の利益のために自然を痛めつけた様子は多くのことを考えさせてくれます。

久しぶりに林の中で、お茶の時間を楽しみました。木々に新芽が芽吹き、青空が葉の色を輝かせ、透き通った風が渡っていく。穏やかな時間が足元の落ち葉に沈んでいく。里山の自然に包まれ、素直な優しい人間に戻れるような気がしました。

今回、会員の皆様には大変お世話になりました。初めての参加でしたが、皆様に暖かく迎えていただき、いろいろなことを教えていただきました。感謝します。ゆっくり楽しみながら学んでいきたいと思えます。今後ともよろしくお願いします。



登山口から観察ポイントの連続



カタクリとキクザキイチゲ



スマレサイシン



思い思いに観察



輝くブナ



芽吹きのパノラマを前景に昼食

特別寄稿 弥兵衛平の環境保全活動をふりかえる（3）

ネイチャーフロント米沢 代表 青柳和良

4. 第1植生回復区最後の播種と第2植生回復区での試験開始

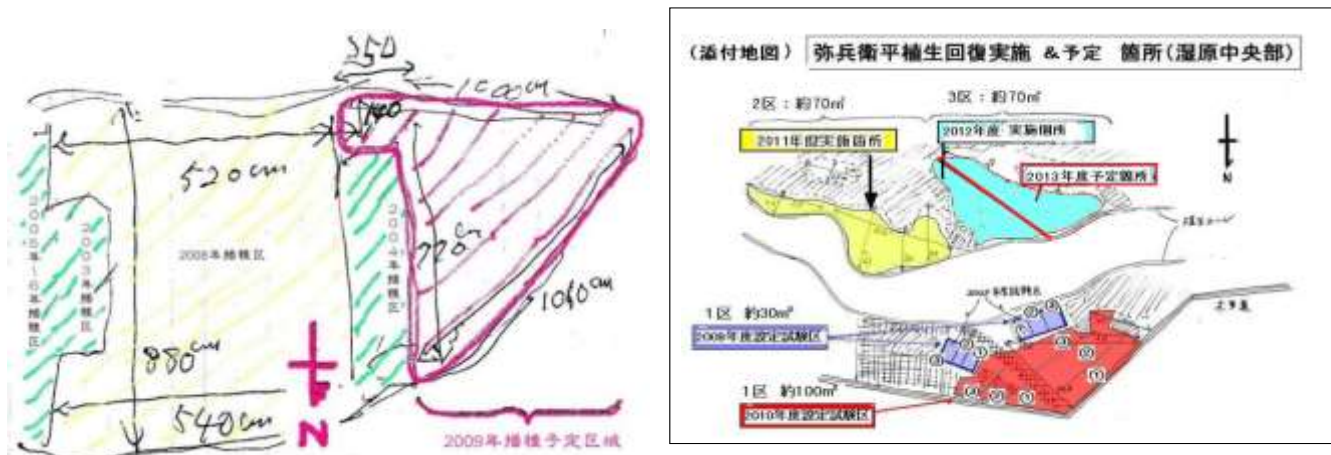
2009年度は第1植生回復区で最後となる播種に取り組みました。

ほぼ楕円形の当該裸地の西端部は下の略図のような形をしています。図の赤で囲み斜線を入れた裸地部分は多少不整形のためメジャーによる実測値を元に35㎡と見積もりました。

一方、第2植生回復区は荒廃地の地形が複雑で面積も大きく、採種種子もマルチング資材もできるだけ効率よく使用することが必要と考えられました。この点については当時の置賜森林管理署のIさんが大変熱心にアイデアを出してくださり、私たちはそのアイデアに沿って実施案を決めました。

下の図は上記Iさんの企画を第2植生回復区の現場に当てはめ、さらに2012年度までの作

業箇所と 2013 年度の作業予定箇所を表現した見取り図です。(2013 年作図)



(添付地図) の説明

第 2 植生回復区の概念図である。この図の各部の大きさは、実際の面積にはあまり比例していない。

2009 年度設定の試験区は紫色、2010 年度の試験区は赤色である。

両年度とも番号の意味は同じで、①は播種密度最高で自然植生から遠い。②は播種密度半分で自然植生からの距離は中くらい。③は播種なしで自然植生に隣接している。

また両年度とも、それぞれ向かって右側半分は藎のみで被覆し、左側半分は緑化ネットのみで被覆している。



2009 年度播種区



2010 年度播種区

上の写真は 2012 年 8 月に撮影した第 2 植生回復区の試験区の様子です。黄色や赤色の線は前頁の見取り図を参照する際に便利のように①～③の番号と共に後から記入しました。

- ・ 両年度とも播種あり(①②)と播種なし(③)の差は歴然としていました。
- ・ 2009 年度と 2010 年度の実証試験から、裸地化した泥炭表層が播種なし・マルチングのみの処置では植物で覆われるまでにかなりの年数がかかると予想され、資材や労力の節約にはならないことがはっきりしました。
- ・ 今後は 2006 年度にほぼ確立された方法、つまり、全種混合、密度は 1 m^2 当たり約 10,000 粒以上、マルチングは緑化ネット 2 枚と藎 1 枚(夏季)～2 枚(冬季)というやり方を踏襲することとなりました。

5月28日(日)、いつものように鹿狼山に登った。今年何回目になるだろうか、緑も大部濃くなってきた。今日は黄色のニガナと白いコゴメウツギが私を迎えてくれた。ニガナがこんなにあったのか、きれいだなあ黄色に包まれて歩いた。気分は上々。昨日は、風が強かったせいか、登山道には小枝やら色々な葉っぱが落ちていた。

さて、先日5月3日に登った時に、私はチドリノキに花が垂れ下がっているのを発見した。鹿狼山に登って10数年になるが、初めての事であった。これまで5月連休に鹿狼山を登ることが無かったので、チドリノキの花を見なかったのか？それとも見落としていたのか？まあ、私の目は節穴だから、大方の物が目の前を素通りしていると自覚しているが・・・。

それで、チドリノキの花を見つけたときは嬉しくて、写真を何枚も撮った。カエデ類の花は簪のようで好きである。チドリノキの花も小さくてはかなげでかわいらしかった。雌しべが退化しているようだったから、これは雄花かなと思って家で調べたら、果たして雄花で、本にも雌雄異株と書いてあった。雌花は鹿狼山にないのかな、どうだろうかと宿題が残った。

ところで、チドリノキの隣には立派なおオモミジの樹がある。今日は、その樹下にオオモミジの葉っぱと果実が落ちていた。オオモミジの果実は翼果であるが、この翼果の開きがカエデの種類によってずいぶん違っている。オオモミジは水平に近い鈍角である。しばらく歩くとイタヤカエデの葉っぱと共にその翼果も落ちていた。イタヤカエデの翼果はほぼ90度位だろうか。形もおオモミジと違って翼に筋が入り、ずんぐりしている。葉っぱの大きさも違うから、果実にも差が出て来るのかもしれない。

カエデの翼果探しがおもしろくなってきた。他にもあるかも知れないと思って、ハウチワカエデやウリカエデ、ウリハダカエデを見てみたが、果実は付いてなかった。カジカエデはどうかと思ったら、葉っぱと果実が落ちていた。写真を見ると分かると思うが、カジカエデの翼果の開きはほとんど無い。「房」部分に細かい毛があるのも特徴的である。

写真を撮るのにどれがイイかと探していたら通りすがりの登山者に「何かお宝探しですか？」と声を掛けられた。「はあ、カエデの果実が落ちてますので」とは言ってはみたものの、誰も興味は示さない。それはそうでしょう。こんなカエデの果実なんてねえ。なぜにカエデの種類によって翼の開き角度が違うのか？何て誰も考えないし、我ながらマニアックなことだ。

それでも私は「違う」ということの発見に時々引き込まれてしまう。鹿狼山にはいつも新たな「発見」があるし、自然は新しい発見の連続だと思う。こんな楽しいことはなかなか止められないと思っている(2017/05/28 記)。



チドリノキの雄花



簪(かんざし)のようにかわいい雄花



カジカエデの翼果は閉じている



オオモミジの翼果はほぼ水平に開く



イタヤカエデの翼果は90度位に開く

東北ブナ紀行（62）

奥田 博

山形県主導で「山形百山」を先月確定した。公募0と市町村推薦で選んだらしいが、選ばれた山には道の無い山も含まれている。市町村推薦の影？が窺える。山形県のブナはトップクラスであると思うが、ブナという視点で選んでも面白かったと思うのは私だけでしょうか？

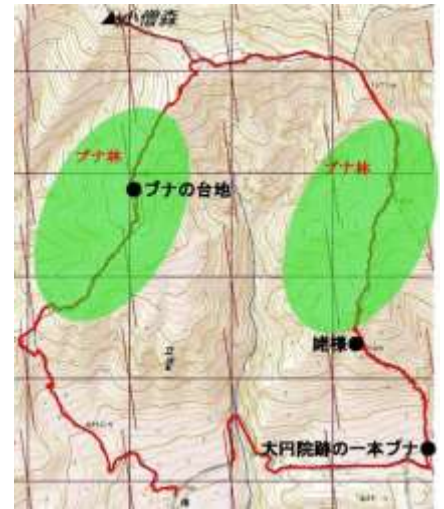
89) 小僧森 1407m

以前紹介した村山葉山の南端に聳えるのが小僧森。畑集落から周回コースを辿るルートは、ブナ満喫コースともいえる。

畑集落から車道で大円院跡まで歩き、登山道に入る。大円院跡には建物は残っていないが、杉林と並んで大ブナが一本、見事に立ち上がっている。時代を見て来た300年モノだ。

この先は、若いブナに囲まれた登山道をたどる。ユーモラスなうば様石像を越えると、急斜面となりブナの大木が混じる林となる。次第に明瞭な尾根歩きとなり、主稜線に出ると大ブナは姿を消す。山頂を往復して、畑への道を下ると、見事なブナ林に戻る。特に素晴らしいのは、標高1240mの広い台地のブナ林。雪の台地に粒揃いのブナ林が、一斉に萌え出したばかりの産毛を煌めかせる様は、圧巻だった。

コースタイム：畑（30分）大円院跡（4時間）小僧森（30分）台地（1時間10分）畑



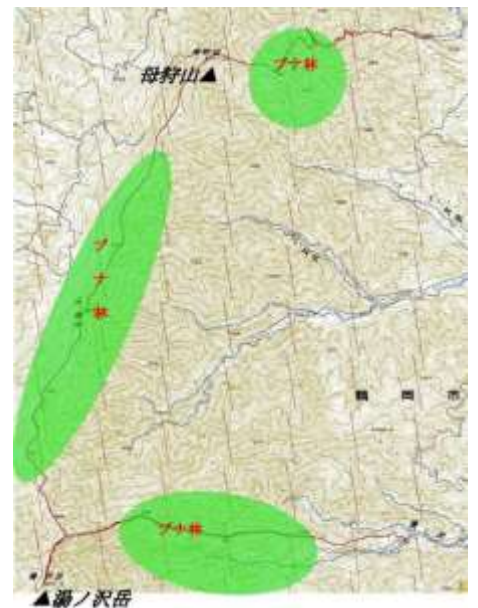
90) 湯ノ沢岳 964m

月山の西側に対峙するように連なる湯ノ沢岳。ここから北に向かって三の俣山、母狩岳、そして金峯山へと長大なブナの尾根が連なる。湯ノ沢岳から南には奇峰摩耶山まで登山道の無いブナの尾根が連なっている。いわば隠れたブナ連峰の一端を歩く。

湯ノ沢岳への登りは、急峻なブナの尾根をたどる。奇形のブナが多いのは、人の手が入っている証拠だろうか。山頂を踏んだらブナの縦走路核心部が始まる。そこは聞きしに勝るブナの森だった。穏やかな尾根に寄り添うようにのびのびと、健やかにブナの森が連なっていた。吹く風は心地よく、時折森が抜けて月山などの山々を眺められるが、ブナの森歩きに終始する。後半は、ヤマボウシの白い花が目についた。最後のピークである母狩山から急な尾根を下るが、ここにも見事なブナが広がっていた。

こうしてブナ三昧の8時間に及ぶ縦走は鮮烈な印象だった。

コースタイム：登山口（3時間）湯ノ沢岳（1時間30分）三の俣山（1時間30分）母狩山（1時間40分）登山口



（写真左）ブナ台地から朝日連峰を望む



（写真右）湯ノ沢岳から母狩山の縦走路の穏やかなブナの森

マルバアオダモ (*Fraxinus sieboldiana* モクセイ科トネリコ属)

里山からブナ林にかけての林縁に生育する落葉広葉樹。別名ホソバアオダモ。アオダモ (*Fraxinus lanuginosa* f. *serrata*) はアラゲアオダモの変種で別名コバノトネリコ。葉以外は形態的な差異を識別するのは困難である。高温乾燥に強いとされ、アオダモより低地に多く自生する。いずれも濡れると樹皮の色が灰白色から緑色に変色する。エスクレチン等の蛍光物質を含み、枝を水につけると紫外線に反応して水が青い蛍光を発する。和名の由来としては樹肌が青っぽいからとの説もある。材は鋏や斧の柄、炭材や薪を縛るのに用いられ、樹皮は、眼疾、痛風の治療薬に使われる等、山村生活に密接に関係してきた。

葉は対生である。奇数羽状複葉。葉身は長楕円形で先端は尖る。葉縁は全縁。アオダモは波状の細かい鋸歯がある。

花は頂腋性である。新梢先端と葉腋に円錐花序を対生して数個着生する。小花は合弁花であるが、白く、長い4枚の裂弁に分かれる。雌雄異株で、雄花と両生花(雌花)をつける株に分かれる。雄花は雄しべ2個、両生花は雄しべ2個と雌しべ1個がある。雄花と両生花の両方の花粉がともに発芽能力をもっている。10月頃、細長いへら状の翼のある果実になる。種子は休眠を必要としない。

冬芽は鳩羽鼠と呼称される独特の紫を帯びた銀色で優雅。アラゲアオダモの冬芽には開出毛が着生する。山を散策していると青く染まった枯れ木が転がっていることが有る。それが(マルバ)アオダモであることは後に知ることになったが、誰が何の目的でこんなところにペンキを塗ったのかといぶかっていた。

ウワミズザクラと開花期が重なり、田植え時を迎えた里山では暫し白花の競演が楽しめる。マルバアオダモの白く細長い花弁は、初夏の爽やかな風にたおやかになびき、光を反射する。その繊細で柔らかな雰囲気は漂う花穂の姿は綿飴の様でもある。ウワミズザクラとマルバアオダモの花の風情は対照的だが初夏を告げる里山の花である。



チドリノキ (*Acer carpinifolium* ムクロジ科カエデ属)

ミズナラ林からブナ林の沢沿いや水分の多い林地に植生する。日本固有種。ヒトツバカエデと共にカエデらしからぬ葉形を有するカエデ類の個性派。葉の外観はヤシヤブシやサワシバに酷似する。イタヤカエデやヤマモミジとは対照的にコロニー的な分布を示す。カエデ類の中では最も湿性地を好み、適地が重なるケヤキやサワグルミの樹幹下に多く植生する。

葉は対生。葉形は長楕円形で中央より先端側が膨らむ。先端は長く尖り、葉縁は重鋸歯がある。葉身には中肋を挟んでシンメトリックな深い並行脈が走り端整。裏面葉脈上に軟毛が着生する。短花枝には2葉のみ着葉する。萌芽葉は淡黄緑色で萌芽葉が紅色を帯びるヒトツバカエデと対照的であるが、秋にはヒトツバカエデと同様に黄葉する。萌芽時の鱗片葉のみが唯一紅色を呈する。

花は頂性。短枝の先端から総状花序を下垂する。雌雄異株。花穂の長さは雄花が長く雌花は雄花より明らかに短い。この雌雄性と花穂の長さの関係はキブシに似る。小花は萼片が4枚で萼片の内側に緑色の先端が尖った花弁を着生するが、開花後間もなく落花してしまう。雄花は5~15個の雄しべを着け、葯は黄色い。雌花は先端が反転した半透明の柱頭を持つ。雌しべの周りに退化した雄しべが残る。萼片及び花弁、子房には軟毛が着生する。ウリハダカエデの花も似たような花序であるが、こちらの萼片は5枚である。開花と共に小花柄が長く伸び花を糸で垂らしたようになる。葯以外は花全体が淡緑色で外観はカエデ類の中では最も繊細で質素である。

今から20年前になるが、高山山麓のケヤキ林が気になりスプリングエフェメラルを目当てに集中的に通った時期があった。ケヤキの葉も赤味が消えた頃、クマシデの様な葉を持つ対生の樹に気づいた。カジカエデやミツデカエデ等のカエデ類が自生する中でその存在は新鮮であった。思いついて久しぶりにそのケヤキ林を訪れた。20年を経て増したその幽玄な佇まいに息を呑んだ。ほとんどが人工林と化してしまったこの一帯のかつての森の姿が偲ばれた。



第 153 回自然観察会案内：東吾妻山・夏の山岳植物観察会

日時：2017 年 7 月 9 日（日）6：30～16：00

集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 6:30 参加定員 20 名

内容：鳥子平から景場平を経て東吾妻山頂に登り、下山は姥ヶ原から浄土平へと周回して山岳植物を観察します。行動時間は昼食・観察込みで7時間を予定しています。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳。ストック利用の際は、登山道穿掘防止のため先端カバー装着をお願いします。

* 装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（500 円）

申し込み：7 月 3 日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。メールの際には「全員返信」モードでお願いいたします。

三十周年に寄せて

穂の実の

佐野 一子

樺の樹齡のいつしか百年越へたるを

己れ静かに語るがに佇つ

音もなく実を落としたる樺の樹元に

吾が身しばし休めむ

樺の実の小さきちを小さくちいおしくだく

活き活きした甘露を得たり

樺のたぎちを底に見て暮れちかき道

黙し下りぬ

幾本もの樺の樹肌にふれたりき

語りかけゆく私は生きると



新年度の会費納入をお願いします：郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第101号 2017年6月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡